

第184回くらしの植物苑観察会 2014年7月26日(土)

—「コメと水」—

西谷 大(国立歴史民俗博物館研究部 考古研究系教授)

今日は人が水田を造るのに、どのような工夫をしてきたかを紹介したいと思います。

横市川流域と伊那谷の水田立地

坂元 A 遺跡

北九州ではじまった水田稲作は、南九州に比較的早い段階で伝播したのにもかかわらず、その後は、西日本や例えば今回南九州と比較する伊那谷(長野県)と比べると広域に普及することはなかった。なぜこのような違いが生じたのかを、自然的な環境の制約という視点から考えてみたい。

坂元 A 遺跡(宮崎県都城南横町)から弥生早期の水田跡が発見されている。日本における水田遺跡としては最も南に位置する。灌漑施設は検出されていないが、不定型な水田区画と畦畔がみつまっている。



遺跡はシラス台地を穿ち東に流れる横市川の沖積段丘上に立地する。その南にシラス台地を穿つ谷(開折谷)がある。現在の横市側流域の水田は、河川沿いの沖積低地からその周辺に広がる沖積段丘上全面に広がっている。横市川流域は、弥生早期から水田として利用されてきたのだが現在目にする水田景観は、比較的歴史が浅く 1712 年に和田用水が作られた以降である。水田は弥生早期から作られ続けるのだが、沖積段丘上でも比較的低く、水が得やすい場所に散在して展開していたと考えられる。

和田用水

和田用水は水田に水を引くためだけが目的ではない。横市川沿いの沖積低地は、頻繁に増水し水田を作るのは危険である。一方沖積段丘は、微高地と低地、つまり乾燥地と低湿地が交錯する場所である。シラス台地を穿つ開折谷が何本も横市川方向に走るのだが、多雨の時期には鉄砲水となり谷頭前の沖積段丘は一挙に増水する。またシラス台地直下からは、5月以降降水が常に染み出し、沖積段丘上で水田を作るには排水面も考慮しなくてはならない。

和田用水は、10キロ先から導水し段丘上の微高地と低地へ水を安定的供給し、水田面積を増やすことを目的としている。それだけではなく、シラス台地直下からの湧水を防ぐため、シラス台地を取り囲むように堤防状の土壁を巡らし、その内側に水を流す。さらに開析谷からの鉄砲水を防ぐため、谷頭に堰を設けている。

弥生早期から17世紀まで、横市川流域全面に水田が展開できなかった理由は、おそらく、南九州に広がるシラス台地という地形と水との関係性が深く影響している。水田を河川流域全面に展開するには、水を上流から引くだけでなく、水をいかに制御するか、その技術が必要だった。

伊那谷の水田

伊那谷は、東には赤石山脈（3000mが9峰）が、西には木曾山脈（木曾駒ヶ岳2956m）がそびえ、その間を天竜川が南流する。伊那谷には11段の河岸段丘が発達し（山側のいくつかの段差面は断層によるもの）、段丘面は天竜川にそそぐ支流によって開析されて田切地形（両側が崖状になっている場所を水が激しく流れる地形）をつくり、木曾山脈側には扇状地も発達している。

縄文時代や弥生時代時代の遺跡は、段丘面上や扇状地上に展開している。



伊那盆地では弥生時代前期に、東海地方から稲作技術をもった人びとが入り込んだと考えられるが、この時期の遺跡は天竜川の支流に面する段丘上に立地する。長野県最古の籾圧痕がついた土器が発見された石行遺跡（縄文時代晩期後葉、弥生I期後半）も、やはり低位の段丘上に立地している。

弥生時代中期前半から後半にかけの遺跡数は少ないのだが、大半が天竜川の氾濫原に面する場所に立地する。ところが弥生時代中期後半から終末にかけては、天竜川の氾濫原から上位の段丘面に移動する。さらに遺跡の分布は、後期初頭から前半になると下位の段丘面だけでなく上位の段丘面に展開していく。

伊那谷では水田遺構は発見されていない。しかし段丘直下には、水が自然にわき出す場所が多く存在する。おそらく初期水田は、こうした比較的水の得やすい場所を選択したのではないかと推測される。

水田の歴史的展開の差異

横市川流域の水田が、流域全面やシラス台地上に展開できなかつたのは、台地上は水を得ることが難しい（現在も水田がない）だけでなく、河川流域の沖積丘陵や沖積低地は一端雨がふると水が氾濫し制御が困難だったためだと考えられる。こうした条件のなかで坂元 A 遺跡の立地にみるように、ピンポイントで水田に適合的な場所を選択したのだろう。一方、伊那谷の場合は、11 も段丘があり、水田を展開していく上で、選択の幅がはるかに多かったと考えられる。そのため弥生時代の遺跡は段丘が発達する右岸に立地する。弥生時代中期の遺跡は氾濫原に展開するが、その後は段丘上に移動するのも、はじめは「実験的」に水田を作るのだが水害の危険率が高く、段丘上へと安全を求めた結果だったのかもしれない。

いずれにしても、自然的な環境が人びとの行動をすべて規定するわけではないが、両地域の水田の歴史的な展開をみると、初期水田においては、地形と水との関係性が水田の発展に強く影響していたといえるだろう。

.....

次回予告 第185回くらしの植物苑観察会 2014年8月23日(土)
「朝顔の彩り(いろどり)」 仁田坂 英二(九州大学大学院)
10:00~12:00(予定) 苑内休憩所集合 申込不要